第１分科会　社会参加と自立

《テーマ》卒業後の充実した生活の実現に向けたＰＴＡの取り組み

Ⅰ　発表の概要

＜発表１＞（栃木県　関東甲信越ブロック）

発表者　栃木県立那須特別支援学校ＰＴＡ会長　和久　千夏子

テーマ　子どもの将来のために・今何ができるか

１　はじめに

本校は、栃木県の北東部に位置し、広域から児童生徒が通学している。今年度は小学部 93 名、中学部 60 名、高等部 144 名、訪問教育学級 21 名で全校生 318 名と栃木県内２番目に大きな学校である。学区が広域であることから、交通手段としてスクールバスが４コースで各コース最大約１時間の乗車になっている。遠距離通学生のためには寄宿舎がある。公共交通を利用しての自主通学生は多数おり、将来の自立の役に立つということで学校も保護者も力を入れている。

ＰＴＡ活動で力を入れていることは、活動を通して保護者間の繋がりをつくる卒業後に向けての仲間作りである。具体的な働きかけとしては、入学時にＰＴＡ活動の説明として「手引き」を配布したり、クラス単位で保護者の懇親会を開いたりしている。その成果かＰＴＡ活動に積極的に協力してくれる保護者は年々増えている。

２　調査研究事業設定の理由

学校卒業後や親なき後への不安を減らしたいと思った。不安に思うのは、地域の現状を知らないからで、現状を知ることで子どもの将来の姿を思い描きやすくなる。知ることで自分たち親が何をすれば良いか考え行動することができると思った。

３　実施事業

（１）平成 11～21 年度の卒業生と保護者へのアンケート調査の実施

アンケート結果（発送 404 通、返信 173 通）の主なもの

現在暮らしている場所は、ほとんどの方が実家で暮らしていた。日中おもに過ごしている場所は、生活介護等の福祉施設が多く、一般企業と自宅という回答もあった。暮らしている場所から過ごしている場所への移動方法は、一番多かったのが施設の送迎、次に保護者の送迎、それから自転車・徒歩・交通機関だった。利用する福祉施設を選ぶ際、送迎があるかないか、自分で通えるか、何をするにも交通手段は重要で、学校時代に学んだ自主通学をする力は大きく役立っていると思う。収入については、障害者基礎年金以外の収入があると答えた方は 57％だった。収入源は給料などだった。福祉施設関係の工賃は一万円前後が多く、給料として五万円以上もらっている方は保護者の援助なしに生活しているようだった。休日の過ごし方で一番多かったのは家族との外出、次に家で過ごす、一人で外出と続いた。地域の集まり、行事への参加、友達との外

出は全体の三分の一ほどだった。余暇の過ごし方に課題を感じた。
※アンケート調査用紙に地域の相談機関一覧表を同封した。

（２）地域育成会と親の会との懇親会の開催

地域で生活する上で育成会や親の会との繋がりはとても大切なものと考える。今まではそれぞれに活動を行っていて、本校の保護者との繋がり、各会の横の繋がりがなかった。そこで、本校ＰＴＡが発起人となって懇親会を開催した。懇談の内容は、各会の活動報告、各地域の福祉情報の情報交換などで、自由に意見を交換した。９月と２月の２回実施し、今年度の秋にも予定している。

（３）卒業生を担当した先生方との懇親会の実施

卒業生への学校のサポート体制を知り、卒業生を送り出した先生方の思いを伺った。

学校では移行支援計画として３年後を見越して計画を作成している。福祉施設では、学校の計画書を活かして支援計画を立てている。その他、就労先でのトラブルなど、相談先がわからない時には学校に相談してくれれば関係機関に繋げてくれる。

卒業後、スムーズに過ごしている事例を見ると、家庭の支える力は大きく、本人の悩みを家庭で処理できているか、自立できるよう教えているかが大切との意見があった。

※実施内容を冊子にまとめ、本校全保護者、教員に配布した。またアンケート回答者と県内知的障害教育特別支援学校に送付した。

４　おわりに

卒業生からは、在校生への励ましの言葉や学校への感謝の思いが寄せられ、学校時代が皆さんの中で、とても大切なものだということを感じた。保護者の皆さんは、この 10 年間で福祉制度は大きく変わり、戸惑われながらもしっかりとお子さん達を支えていらっしゃることがわかった。しかし、アンケートの中で、思い悩んでいることも伝わってきた。「充実した学校生活」「地域との繋がり」「余暇支援」「家族力」など、私たちが取り組まなければならない課題がうかんできた。
研究テーマは「子どものために・今何ができるか」であった。子どもの将来の生活を予想しながら、ＰＴＡ活動を通して学校から地域、社会へと繋がりを広げていくことが大切で、親からの一番の遺産は、本人の支援の輪を拡げておくことだと感じた。これからのＰＴＡは子どもたちの今と将来の充実を皆で考えて行動していける場でありたいと強く思う。

＜発表２＞（奈良県　近畿ブロック）

発表者　奈良県立奈良東養護学校　元ＰＴＡ会長　江川美奈子

テーマ　子供が主役～世界遺産・地域のみなさんとつながって

1　はじめに

本校の校章の二重桜は、２つの学校が統合して１つになったことを表している。本校を一歩出ると、大池からの薬師寺が見える。この風景は絵はがきにも使われており、学校を出ると毎日この風景を見ることができる。私たちの学校は、非常に贅沢な環境の下にある。Ｓ46 年に知的養護学校西の京養護学校が開校し、３年後のＳ49 年に病弱養護学校が開校し、Ｈ17 年にこの２つの養護学校が統合され、本校が誕生した。さらにＨ20 年に過密解消のため、本校から分割し、奈良西養護学校が新設された。

毎日スクールバスが到着すると、先生方が笑顔で迎えてくれる。校長先生が一人一人に毎日「おはようございます。」とあいさつしてくれる。最初はあいさつできない子も、校長先生の顔を見てあいさつできるようになる子が多い。

2　世界遺産の中での実習

ＰＴＡがＮＰＯ法人と県内初の協働関係を構築し、生徒の現場実習先の新規開拓に取り組んだ。その結果、奈良がほこる世界遺産、一般企業、行政などへの実習参加を多数実現した。開拓した実習先としては、薬師寺、春日大社、奈良交通、奈良県立奈良病院売店、県庁喫茶などがある。様々な実習先で、しおり作り、草木の手入れ、社内メール配達などの体験をさせていただいた。これらすべての実習にあたり、ＰＴＡ会長、ＰＴＡ役員、学校長がみんなでお願いに上がり、実習終了後もあいさつに伺った。

3　雇用の啓発

障害者雇用啓発街頭運動では、早朝８時から８時半まで、子どもたちがビラやティッシュを配る運動を行った。ここに学校の先生、ＰＴＡも参加し活動している。地域の雇用を考えるシンポジウムでは、司会を担当した。子どもたちはやればできるという体験ができた。みんなにチャンスが与えられるよう、子どもたちを主人公に据えて取り組んだ。

4　保護者の思いを伝える

保護者の思いを伝えるということで、奈良東養護学校と奈良西養護学校のＰＴＡが協同で「地域福祉を考える会」を開催した。奈良市の市立の事業所に集まっていただき話を聞いたり、保護者の思いを伝えたりした。翌年には、生駒市の福祉について学ぶ会を同じ形式で行った。

自立支援協議会では、高等部生を対象にアンケートを作成している。卒業後はどのような進路を希望しているか、卒業後、20 年後、30 年後の生活についても保護者がどう考えているか、また当事者がどう考えているかわかる内容のアンケートを作成している。

5　子どもたちの生きる力を育むために

「みんなで楽しくパン作り」では、放課後、栄養士の先生を講師に親子でパン作りを行った。放課後どれだけの人が集まれるか、衛生面はどうかなどの問題はあったが、１年間じっくり計画し、実現した。親子でとても楽しく活動することができた。

今年はクッキングサークルを発足し、親子で共に活動している。ＰＴＡでレシピや写真付きの手順表を作った。クッキング当日の意識付けに、前もってレシピや手順表で何を作るか学習してから参加している。データは共有できるようｗｅｂページに掲載している。

6　インクルーシブ教育に向けて

（１）奈良東の文化祭

奈良東養護学校の文化祭にせんとくんがやってきた。子どもたちだけでなく、先生方や保護者、みんなが喜んで迎え、とても盛り上がった。

（２）わくわくまつり

今年度、わくわくハッピーコンサートで、地域の中学校の吹奏楽部の生徒を招き、コンサートを行った。小学部と高等部の子どもたちが教わっているところに、高校や大学のボランティアの学生さんに参加してもらった。

（３）京西校区学校園協議会

「地域の子どもたちを守ろう」ということで、地域の中学校区の学校、自治連合会が集まって会議や研修会を開いている。障害のあるなしにかかわらず、どの子もみんな地域で守ろうということで活動している。今年度は、東北の震災についての講演会を開催した。ＰＴＡでは、第二次避難所としての機能の充実のため、水・食糧の備蓄を始めた。

7　公共の場づくりのためのモデル事業

社会参加と就労への道への創出へ、ということで県・教育委員会・ＮＰＯ・事業所・学校・ＰＴＡが協働し、新しい事業に取り組むことになった。民間事業所への職場実習の開拓、また社会参加の創出を目標に活動している。行政は行政のサービスを推進し、教育委員会ではキャリア教育の推進、これをコーディネートするのが一般ＮＰＯということ。ＰＴＡとしては当事者の代弁者となって、これらの事業所にさらなる継続的な実習の受け入れをお願いしている。モデルケースの目指す３つの方向性は、「県モデルケースを市町村へ」「特別支援学校生徒からすべての障害者へ」「人材から“人財”へ」ということでやっている。

8　おわりに

奈良東養護学校はいろんなＰＴＡ活動があり、今日はかいつまんで発表させていただいた。私が常に思うのは、奈良東養護学校のＰＴＡは学校と両輪であること。困ったことがあったら学校に行き、教頭先生、ＰＴＡ担当の先生に聞いてもらって、いろんなことを率直に話し合い、いろんな思いを伝えながらやっている。ＰＴＡ活動は学校と両輪。

以上が、夢をもち、夢を育む奈良東養護学校のＰＴＡ活動である。

Ⅱ　質疑応答および研究協議

質問①―１

余暇時間や休日の日をうまく使えていない人は、就労の継続が難しく、生活も乱れてしまうことが多い。余暇の時間がうまく使えていない人に具体的にどのような活動があるか、どんな生活の仕方があるのか等を、どのように指導しているのか教えて欲しい。

応答①―１

学校のＰＴＡとしては問題点を把握したところで、勉強会や研修会へこれから発展する段階である。児童デイサービスの利用で、学校からそのままデイへという利用の仕方が増えているので、低学年の保護者の意識が薄い。育成会や親の会などの紹介することで自分たちにできることを見つけ卒業後のことを知っていき、勉強会や研修会をしていきたい。

質問①―２

余暇の過ごし方のアンケートで「家族と過ごす」というのが多かったが、卒業生が集まって何かをするということはあるのか。地域に支援をしてくれるところがあるといいと思う。

応答①―２

同窓会と親の会で集まってのレクリエーションは年に何回かあるが年齢が高くなると参加が難しい。親と一緒の活動が多く軽度の人同士で出かける活動は少ない。親の会で６月に総会、７月にボーリング大会があるが、そのほかは学校の行事に参加するくらいで、卒業生同士のかかわりは少ない。

質問①―３

卒業後３年間の支援計画を作っていて、その支援計画に基づいて、福祉施設などが参考にして、利用者の計画を立てるということであったが、学校で作る教育支援計画について、わかる範囲で教えていただきたい。

応答①―３

例えば接し方であったり、日常の生活についてであったり、このように指導すれば本人ができる、というような内容が細かく書かれている。学校の先生は、卒業後も卒業時に担任だった先生が、折に触れて電話してくれ、面倒を見てくれる。また、現場実習の際には、卒業生のことについて担当者と話をしてくれ、卒業生がスムーズに生活できるようケアしてくれている。

質問②―１

ＮＰＯ法人と学校が協働して実習先を開拓しているし、実際に実習もしているということだったが、学校の授業の一環として行っているのかと実習としてそこに行っているけれども、普段そこに障害のある方が就労しているのかを伺いたい。

応答②―１

実習は学校の授業の一環として行っている。実習先に障害のある方が就労しているかという点に関しては、ソルノリーブスさんでは、すでに１２人の障害のある方が働いていると先日の県庁での会議で聞いている。今、ＮＰＯとしては、学校と新しい実習先の開拓に励んでいる。

質問②―２

実習をすることによって新たな雇用の場所の開拓につながるということで、ＮＰＯ法人と新しい雇用改革の仕組み表ができていたが、その辺のことをお聞きしたい。また、表の中にハローワークが入っていなかったが、もしハローワークが何か役割を果たしているのであれば、お聞きしたい。

応答②―２

ハローワークさんの役割については、具体的なことについてはこれから決まる。新しい雇用改革の仕組みについて、２日前にキックオフ会議があったところで、資料はたくさんあるが具体的にどのようにしていくかを話し合っているところ。例えば、実習に行く際、学校の授業に講師としてお招きするなど。これから今までの事業をさらに拡大していくというところをもっと伝えられればよかったが、２日前に会議があったところなので、まだみなさんにお伝えできるところまでいっていない。

質問②―３

県行政と教育委員会のコーディネートをＮＰＯ法人が行うという発表内容について、具体的なことはまだこれからということであったが、それでも何となくの構想でもいいので、お聞きしたい。

応答②―３

実習開拓などに学校の先生が頑張っているが、しかし児童生徒の数が増える一方などの事情があり、ＮＰＯ法人が仲立ちとなり県行政との相談によりこの企画ができあがった。就労に向けての取り組みや養護学校の高等部に福祉コースを設置する、福祉コースを設置するにあたっての講師の人材派遣などが計画されている。基本方針はこういう形だというぐらいしか決まっていない。本校とすると、この間奈良県で差別をなくす集会が市町村であったが、ＮＰＯ法人にお願いして障害をもっている子供どもを広く知ってもらおうという形で参加させていただいた。そういった形で、地域行事に参加している。

Ⅲ　指導助言

＜助言者　障がい者・児　相談支援センター　さん・ぽ

室長　　天田　和也＞

先ほどのお二人の発表を伺って、テーマは「社会参加と自立」ということでしたが、私も県内高崎市を中心とした特別支援学校に伺い、保護者さんに福祉制度の説明をしている。特に自立支援法から新法に移行するという時期で、いろんな福祉制度が変わり、本当にわかりづらい。例えば、小学部から設置されている学校に行くと、福祉のサービスを使ってみましょうねという話をさせてもらうが、いつからヘルパーさんを使った方が良いのか、どんな時にどんなサービスを利用すればいいのかということは、保護者さんが悩んでいる部分だと感じる。ヘルパーさんを利用するかは本当に必要な時からで良い。

先ほど来年の４月から始まる放課後等児童デイサービスという新しい制度の話が

でたが、現在、みなさんの地域でも放課後の児童デイサービスⅠ型、Ⅱ型と２つあると思うが、Ⅱ型のサービスでは、放課後のサービスとか夏休みのサービスが行われている。そうした事業所が、放課後等児童デイサービスに移って、今までは療育がメインであったが、これからは余暇等にも力を入れてもらえるのではないかと感じている。

私は保護者さんと相談をするなかで、こんなことに困っているがどうしたらよいか、などの相談を受け福祉的なサービスに繋げていくことを主な仕事にしている。お子さん達が社会参加をするとなった時に、例えば一人でどこかに行けるということも大切なことだと思う。また一人でご飯が食べられる、トイレに行けるとかそうしたこと一つ一つが大切なことだと思うが、本人主体でいろいろなことをしていくなかで、「嫌なことは嫌だ。こうしたい。」と表現できることが大切だと思う。私の所には、重度から比較的軽度の方まで来るが、重度の方達は表情や行動で、嫌なことは嫌だと表現するが、軽度の方達はあまりそういうことをしない。尚かつ、保護者さんが隣にいると「どうですか。」と質問しても、本人がしゃべる前にお母さんがしゃべってしまい、本人はなかなか自分の気持ちを伝える機会が与えられない。今回はお母さんの話を聞いたので、次回は話をしたいというと、お母さんは不満そうな顔をする。うちの子は、「私がいないとだめなんですよ。」みたいに。ただ、社会参加とか自立ということを考えた場合、自分で言えるとか表現できるということはすごく大切なことだと、本人さん達に関わっていて思う。これから福祉制度が変化していくなかで「障害があっても地域で暮らしていく」という基本的な部分は変わらないと思う。

先ほど和久さんより、地域との繋がりが大事というお話があったが、群馬県では、特別支援学校進路支援連絡協議会が主催をし、夏休み中に「地域生活支援ネットワーク会議」という取り組みが各地域で行われている。障害種別関係なく、その地域に暮らしているお子さん達がそれぞれの地域に集まって、その地域の情報を交換したり、福祉制度のことを学んだりする機会となっている。

卒業に向けてという点では、移行支援会議や個別支援会議というかたちで、進路先事業者、保護者、本人、私たちのような相談支援事業者等の関係機関が一同に集まって会議を行っている。学校での様子、本人の希望、卒業後の生活等について学校や保護者、本人からお話を聞き、関係者が情報を共有し社会に出て行く。そして、卒業後何か課題があった時には、地域も学校も一緒になって考えていくという取り組みを継続して行っている。そういう点では、早い時期から地域との繋がりをつくっていくことが大切だと思う。私は保護者さんに話をする時、お子さんのネットワークの図を作って下さいとよくお願いをする。本人を中心において、例えば学校の先生だったり、病院の先生だったり、ヘルパーさんがいたり、卒業後であれば通所施設の人がいたりとういふうに、どんな人たちが関わってくれているかというようなネットワークというか、本人を取り巻く環境図みたいなものを作っていただけるといいかなと思う。それと同時に、今は比較的フォーマルという言い方をするが、もっとインフォーマルな部分で、隣のおじさんが実はうちの子をよく知ってくれていて時々面倒を見てくれるとか、〜ちゃんのお母さんとか、フォーマルでない部分の社会資源になるかもしれないが、その方のことをよくわかってくれていて関わってくれる人を作っておくことがすごく大切なことだと思っている。

来年４月から、みなさんのお子さんが障害福祉サービスを利用する際、ケア計画を作るようになるかもしれないと言われています。それを担うのが、地域にいる相談支援専門員さんという形になっている。そこで、相談支援専門員さんと相談して、ケア

計画を作ることになるが、福祉サービスだけではまかないきれないものがでてくる可能性がある。相談員さんはたぶん市町村からの委託で業務を行っているが、お母さんと話をしていく中で、この部分は地域にないサービスだ、ということが出てくると思う。また、市町村が主体となって行っている事業で、ここの部分が使いづらいから上手く使えないとか、そうした話を聞いて来て自立支援協議会に持って行くのが私たちの仕事の一つになっている。実際に多くの地域では、地域自立支援協議会を立ち上げて、協議されているところが沢山ある。地域自立支援協議会にＰＴＡや親の会の代表の方が出席していることがある。色々な形でそうした方々と話をしながら地域を作って行こうというのが自立支援協議会の役割である。なので、是非皆さんの声が届くようになって欲しい。高等部を卒業した後暮らすのは地域なのでやっぱり地域で支える仕組みを作らないといけないと思う。私も長くこの仕事をしていて、子供も保護者もかなりの年齢になってお母さんは年金受給までが私の仕事と言っている人もいる。そうかと思うと、先程の和久さんの発表にもあったが卒業後の福祉施設の利用でも保護者が送迎している施設が沢山ある。そうすると卒業後も保護者がずっと見ていかなければならない。やはり地域で支えて行ける仕組みが必要になって来る。皆さんが戻られたら、皆さんの地域の相談支援員、相談支援事業所がどんな状態なのかを調べてもらい、中々上手に使えないようなら和久さんや江川さんの様な活動をしている人を巻き込んで学校などにも様子を見に来てもらったりして、地域に居る相談員を使ってみて欲しい。

ノーマライゼーションという考えが進んでいく中で、子供がノーマライゼーションの中で生活していくのと一緒に、保護者もノーマライゼーションがあっていいかなと思っている。是非養護学校のＰＴＡの活動の中に、地域を巻き込んで作る活動を入れてもらって、「学校を卒業して年金をもらえるようになるまでが私の仕事で、それからは私の人生を歩きます。」というくらいの気持ちになれるようになっていって欲しい。本当にＰＴＡの皆さんの活動には頭の下がる思いがする。ただ、卒業までは守られている中で生活できるが卒業後の生活は厳しい。将来に向けてお子さんをどう育てていくか、学校の先生とＰＴＡが共に取り組んでいただけるとありがたい。